

ネム

象潟や 雨に西施が 合歓の花

芭蕉

芭蕉が奥羽行脚を思い立ったのは、松島や象潟のような名所旧跡を一度は目にしておきたい、できたら西行の足跡も辿ってみたいとの思いからであろう。象潟は『おくのほそ道』（1689年）の最北の地である。当時の象潟は九十九島を擁する湖であり、西行も訪れた景勝地であった。支那の西湖にも比された。蘇東坡の詩『西湖』に「水光潋灩^{れんえん}として晴れて方に好し。山色空濛^{まさ}として雨も亦奇なり。もし西湖をもって西子に比せば、淡粧濃抹^{くもう}総て相ひ宜し」とある。西湖の美しさを西子（越の美女西施）に譬えている。芭蕉がようやく象潟にたどり着いたときには、生憎の雨であった。灰色の風景に、ネムの花だけが鮮やかな色彩を湛えている。とっさに蘇東坡の「雨も亦奇なり」が思い浮かんだのである。

翌日は晴れで、蚌満寺から眺めると、小島の点在する湖面には、雄大な鳥海山が映っている。圧巻の大パノラマである。ただ芭蕉はこの景観を句には残していない。同様に松島の絶景も一句も詠っていないのである。何故であろうか？実は筆者も、俳句を作るように写真撮影しているが、何冊か出した写真集には、誰もが撮るような観光写真は載せていない。芭蕉もきっと同じであろう。雨に煙る象潟に、薄命の西施の非運を写し出したかったのである。この句には場所（象潟）、季語（雨）、人（西施）、花（合歓の花）が並べてあるだけで、動詞も形容詞もない。それでいて合歓の花になぞらえた西施の美しい眠り姿を彷彿とさせる。

ネムノキは、夜になると左右の複葉が合わさって閉じる（眠る）ことから命名された。薬用部分は樹皮で、日本ではこれを煎じて鎮痛、打撲、利尿などに応用された。『神農本草経』では「合歡」（中品）として登場し、「五臓を安んじ、心志を和し、人をして歡樂して憂なからしむ。久しく服すれば身を軽くし、目を明らかにし、欲する所を得る」とある。漢方では殆ど用いることはないが、中医学では「合歡皮」は「合歡花（ネムの花）」とともに安神薬に属し、不眠、不安、抑鬱などに使われている。

象潟は文化 6 年（1804 年）6 月 4 日夜、大地震に見舞われた。4～5 m の大津波が襲来し、象潟周辺では地割れ、液状化現象で、泥海となった。家屋の倒壊率は 70% に達したという。出羽国の沿岸は南北 25 km に渡って隆起（象潟では 2 m）し、象潟湖は干上がってしまったのである。もう誰も芭蕉が感嘆した象潟の絶景は見られなくなった。

筆者は富士山に次いで鳥海山が好きで、時々訪ねている。周辺の湖沼群に写し出される鳥海山は絶好の撮影スポットである。ただある時から、立ち並ぶ風力発電の風車が景観の邪魔をするようになった。釧路湿原や阿蘇高原の大規模なソーラーパネルの設置もそうだが、日本人の美意識はどこへ行ってしまったのだろう。

地球温暖化対策の掛け声の元、再生可能エネルギーの開発が進んでいる。発電効率では水力≫風力>太陽光、地熱≫バイオマスの順に高い。水力発電は大型ダム代わりにマイクロ水力発電が注目を浴び、現在地方自治体が川や農業用水路、上下水道に発電機を設置し始めている。また日本の地熱資源量は世界 3 位の豊富さで、まだまだ地熱発電の余地はある。水と湯は日本の最も恵まれた資源である。再生可能エネルギーにはメリットとデメリットがあるが、太陽光と風力発電は、最近デメリットが際立って来た。風力発電については、低周波による騒音が不眠やストレスを誘発し、住民を悩ませている。この不眠はもはやネムの花では癒されない。芭蕉の美意識に立ち戻るしかないであろう。

（山人）

